

直言

生命だけは平等だ



徳田 虎雄
一般社団法人徳洲会代表者最高顧問
医療法人徳洲会理事長

徳洲会グループの国内66病院の急性期病床は約1万6000床ですが、介護・福祉施設は約7000床にすぎません。今後の病院の運営は、介護老人保健施設(老健)や特別養護老人ホーム(特養)などの介護・福祉業務抜きでは考えられず、将来的には病院の病床数の2倍が必要となるでしょう。

少子高齢化、人口減による危機が叫ばれていますが、高齢化率は上昇を続け、20年後には65歳以上の高齢化率は33・3%、3人に1人が高齢者になると推測されています。

それだけに、徳洲会グループにとって、病院と介護・福祉施設のネットワークの整備は急務と言わざるを得ません。

「定期巡回・随時対応型訪問介護看護」を創設。このサービスは、ヘルパーや看護師が利用者宅を1日数回定期訪問し、緊急時には24時間体制で対応する地域包括ケアシステムのひとつ。要介護高齢者の在宅生活を支えるために、日中・夜間を通じて訪問介護と訪問看護が連携しながら、定期巡回訪問と随時の対応を行う

う地域密着型のサービスです。すでに125事業所が開設を終え、公募の終了が間近という自治体も出てきています。徳洲会でも参加への機運が生まれており、グループとしても積極的に取り組んでまいります。

病気を治すだけでなく病後の生活も支援していくのが、私たち徳洲会の役割ではないでしょうか。

重度の要介護の方たちを福祉施設で引き受けよう

昨今、独居による孤独死が問題となつています。NHK無縁社会プロジェクト取材班の単行本『無縁社会―無縁死三万二千人の衝撃―』(文藝春秋刊)には、誰にも看取られることなく息絶え、遺骨の引き取り人もいない人が年間約3万2000人と記されています。徳洲会グループが在宅に力を注ぎ、訪問介護を行うのは独居の方たちを助けたいからです。

高齢者が増えていくにも、かかわらず、総量規制の問題があり介護福祉施設の開設は容易では

「生命だけは平等だ」の理念の下に困っている人弱っている人を助けるのが私たちの使命

喀痰吸引など医療行為のできる介護職員の養成が急務



徳田 哲
医療法人徳洲会副理事長

ありません。徳洲会は、今後も病院とその周辺に介護施設を整備し、24時間巡回型訪問サービスにも積極的に取り組めます。

2012年度、厚労省は社会保障制度改革の方向性として「医療から介護」、「施設から在宅」への移行を掲げており、重度の方も在宅で看るよう図っています。

現在、一般的な老健や特養ではALS(筋萎縮性側索硬化症)のような重い病の患者さんを引き受けている施設が少なく、徳田虎雄理事長は1施設あたりALS患者さん3人引き受けることを強く願っています。そこで徳洲会では、老健や特養有料老人ホームなどでも、重度の要介護の方を引き受けていくために、医療行為のできる介護職員の養成を急ぎ、喀痰吸引などの研修を実施する予定です。研修は50時間で、内容は口腔・鼻腔・咽頭内吸引、胃腸接続です。

徳洲会では、今後もさらに介護職の質の向上に努めてまいります。

ALSは内科認定医の必修プログラムのひとつ

私は研修医時代、当直時に救急車が来れば不安と恐怖心でいっぱいでした。そこでALS(二次救命処置)の研修を受け、救急の対応に自信が付き救急車が来ても不安なく迎え入れられるよう

になりました。そうした経緯から、研修医のために03年に徳洲会ALSコースをスタートさせ、名称をTCLS(徳洲会二次救命処置)コースに変更し、第29回からは日本救急医学会ICLSの認定コースとして活動。昨年末までに96回、2830人が受講しています。

阪神・淡路大震災を機に結成されたTDMAT(徳洲会災害医療援助隊)は、05年にNPO法人の認可を受け、TDMAT(徳洲会医療救援隊)として再スタートし、国内外で医療支援活動を重ねてきました。TDMATは被災地の活動に必要な知識とスキルを修得できる教育プログラム「災害救護・国際協力ベーシックコース」を07年7月から始めました。任意の受講にもかかわらず、これまでの修了者は消防隊やグループ外の病院の方を含め34回、868人(12年9月末現在)を数えます。

TDMATはこれまで、海外の連携機関と協力しながら医療支援活動を行ってきました。東日本大震災では、アメリカ医師ら28人を含む42人が参加。TDMATは今後、海外にも災害対策チームを設立していく予定です。

「生命だけは平等だ」の理念の下に、困っている人、弱っている人を助けるのが私たちの使命です。皆で頑張りましょう。

未来医療研究センター

リモートSDV運用開始へ コスト減で治療増に期待 東京と大阪で各院の電カル閲覧



「リモートSDVで治療実施施設としての徳洲会グループの価値を高めます」と山路社長

徳洲会グループは新たな治療ネットワークシステム「リモートSDV(Source Data Verification)」の運用を1月15日から開始する。

これは、(株)未来医療研究センターの本社(東京)と大阪オフィスに専用ルームを設け、そこに設置した端末(パソコン)から各病院の被験者さんの電子カルテ情報へのアクセスを可能にするもの。

徳洲会インフォメーションシステム(株)の協力の下、実現した。

リモートSDVにより、治療の依頼者(製薬会社)は、治療に要するコストや時間を大幅に削減できるのが最大の特徴。徳洲会グループはこうしたメリットをアピールし、治療の受託数増加を目指す。SDVとは製薬会社のモニター(調査員)が行う「原資料の閲覧」を行う。具体的には、治療の実施施設である病院が作成した症例報告書などと被験者さんの電子カルテ情報との照合を行い、治療実施の適切性やデータの信頼性などを検証する。

従来、こうした作業はネットワーク化していない場合、直接病院に足を運んで行っていた。しかし、東京、大阪から遠く離れた病院で治療を行う場合、モニターの出張費用や時間がかかり、コスト増となっていた。

徳洲会グループは全国各地に病院を展開し、東京、大阪から遠く離れた地域にも多数の施設をもつため、「遠隔地のハンディキャップを軽減し、治療を実施する施設として、徳洲会グループの価値を高めるために、リモートSDVを企画しました」と、未来医療研究センターの山路弘志社長は12月22日の徳洲会医療経営戦略セミナーで説明。

さらに都市部の病院にとっても、モニター来院時の対応業務の軽減といったメリットが期待でき

リモートSDVのシステムは、未来医療研究センターの東京・大阪の両オフィスにそれぞれ2部屋ずつ設けたりリモートSDV実施室に設置した端末から、対象施設に設置した専用サーバを経由し、電子カルテ情報を閲覧するという仕組みだ。

電子カルテの閲覧には、入室前の本人確認、入室用のIDとパスワード、対象施設のサーバにアクセスするためのIDとパスワード、さらに電子カルテにアクセスし閲覧するためのIDとパスワードの入力が必要。

今回誕生したリモートSDVによる大規模な治療ネットワークシステムは、グループ内で同一の電子カルテシステムを導入し、治療システムの標準化も図っている徳洲会だからこそ実現できた。

現在、北海道から沖縄まで徳洲会グループの21病院に専用サーバを設置済みで、当面はこの21病院を対象にシステムを運用していく。

製薬会社向けにこれまで2回開いた説明会には、合計で約200人が参加し、好評だ。製薬会社からのニーズが多ければ、リモートSDV実施室の増設も検討するという。



未来医療研究センターのオフィス内に設けられたリモートSDV実施室

室内は監視カメラも設置し、厳重なセキュリティ管理の下、患者さんの個人情報や万全の体制で保護している。

電子カルテは閲覧のみ可能で、カルテ情報の改変は一切できない。だが、病院を訪れているのと同じように、パソコンの画面を見ながらの作業が可能だ。

リモートSDVのシステムは、未来医療研究センターの東京・大阪の両オフィスにそれぞれ2部屋ずつ設けたりリモートSDV実施室に設置した端末から、対象施設に設置した専用サーバを経由し、電子カルテ情報を閲覧するという仕組みだ。

電子カルテの閲覧には、入室前の本人確認、入室用のIDとパスワード、対象施設のサーバにアクセスするためのIDとパスワード、さらに電子カルテにアクセスし閲覧するためのIDとパスワードの入力が必要。

今回誕生したリモートSDVによる大規模な治療ネットワークシステムは、グループ内で同一の電子カルテシステムを導入し、治療システムの標準化も図っている徳洲会だからこそ実現できた。

現在、北海道から沖縄まで徳洲会グループの21病院に専用サーバを設置済みで、当面はこの21病院を対象にシステムを運用していく。

製薬会社向けにこれまで2回開いた説明会には、合計で約200人が参加し、好評だ。製薬会社からのニーズが多ければ、リモートSDV実施室の増設も検討するという。

笠利病院 口腔リハビリ勉強会

笠利病院(鹿児島県)はこのほど、口腔リハビリテーションの院内勉強会を開催した。講師は宇治徳洲会病院(京都府)の吉尾恵子・歯科衛生士(日本摂食・嚥下リハビリテーション学会評議員)で、食事前の嚥下体

操や具体的な口腔ケアの方法、誤嚥性肺炎の予防法などを、写真を多用したスライドで解説した。吉尾・歯科衛生士は同院に1週間ほど滞在し、同院と関連施設の口腔ケア指導も行った。全病棟をラウンドして入院患者さんの口腔状態やケア内容をチェック。隣接するグループホーム美笠では、

入所者さんの嚥下機能に合わせて食事形態をアドバンスしたり、通所リハビリで食事前嚥下体操を指導したりした。

同院はこれを機に、口腔ケア体制を強化、名瀬徳洲会病院(鹿児島県)から応援で訪れる言語聴覚士とともにNST(栄養サポートチーム)を結成する方針だ。